

ロシア革命 100 周年討論会へのコメント

2017 年 8 月八木健彦

従来ロシア革命〇〇周年という、10 月社会主義革命の世界史的意義とレーニン主義・第3インターの継承としてのスターリ主義批判というように通常提起されてきた。ソ連崩壊後は、崩壊の根拠をどう求めるのか、あるいは社会主義革命に踏み出したソ連の変質の根拠をどう求め、またどのような変質であったかを論じ、そしてレーニン主義の突き当たった壁を問題にすること etc としてなされてきた。〔註〕

〔註〕そこでは、従来のトロツキー的な社会主義＝国有化＋計画経済、官僚は独自の階級ではなく労働者国家(プロレタリアート)に寄生した階層といった考え方の克服を前提とした。その際の考え方は基本的に三つに要約される。

- ①生産手段を Br から収奪したのちに、それを実際に労働者勤労大衆の手に引き渡すこと、すなわち労働過程の指揮・管理・運営に労働者大衆が参加し、その自覚的な主体として自主的組織化を進めていき、賃労働制の痕跡(精神労働と肉体労働の分業や労働の位階位制的編成等)をなくしていくこと。
- ②商品・貨幣をなくしていく＝それを不可避としている本能的共同行為としての交換ではない、別の社会的共同行為としての生産・分配をつくりだしていく。
- ③国家についてコンミュン 4 原則に加えてレーニンが指摘しているコンミュンを生産過程と結びつけ、また公務を順番性に基づいて全成員にその能力を育成習熟させる。

官僚主義が国家機構をとらえ、かつ生産過程の組織と結びつくとき、それは一つの独自の社会的力として確立し、生産と分配の指揮権をもって全社会を制圧していく。それは明白に独自の階級的地位と力である。工業化と農業集団化を通じて明確に一つの社会的体制へと転化した。

今、私は少し視点を換えて論じたいと思う。それは従来共産主義運動においてもあまり掘り下げては問題にされてこなかった事柄、〈21 年の転換〉をどう見るかであり、むしろこれを 10 月革命に比すべき画期ととらえ、共産主義運動史の中に位置づけ直すことである。

(1) 〈21 年の転換〉の背景について

〈21 年の転換〉はロシアにおける NEP への転換と第3インターでのヨーロッパ革命をめぐる持久戦への戦術転換(統一戦線戦術)、そして東方の民族革命の重視と連動した一つながりのものであるが、ここではロシアにおける NEP への転換を問題にしたい。

従来、ロシアでの〈21年の転換〉は10回大会の一時的例外的措置としての分派禁止決定と相まって、やむをえない後退・一時的妥協として否定的に評価されてきた。

戦時共産主義の最終局面で生じた「労働組合論争」(労働過程の管理運営、労働の組織化の主体と方法をめぐる論争)と3傾向への分解とクロンシュタット叛乱によってもたらされた危機を国際共産主義運動の逢着した壁と考え、10回大会の分派禁止決定にその端的な表現とみてきた。しかしこれは一面的である。

クロンシュタットの反乱は労働組合論争とは無関係である。(クロンシュタットの反乱が生じるような現実において、それと全く離れて「労働組合論争」が白熱していることにこそ危機はあったのだ。それはレーニン自身も感じていたことであつたらう。)

10月革命の拠点であつたクロンシュタットの反乱は戦時共産主義への農民の明確な異義申し立てであつたのではないか。クロンシュタットの水兵は軍服を着た農民でありその反乱のスローガンはつまるところ「ボルシャビキ抜きのソビエトを！」であつた。それがレーニンたちをして弾圧に踏み切らせたものであつた。

(レーニンは赤軍勝利が明白となつたこの時期、世界の Br は「ソビエトは認めるが、ボルシャビキは認められない」と唱和していると論じている)クロンシュタットの水兵＝軍服を着た農民がボルシャビキを拒否したこと、それは食糧徴発の行動等に見られる戦時共産主義の農民政策への拒否宣言であり、その破産を示していた。

私は食糧徴発という政策が当時の内戦下においてやむをえないものであり、必要なものであつたとも思う。しかしそれを富農・上層農民に対する貧農・下層農民の階級闘争、農村における社会主義革命と路線化したのは大いなる誤謬、観念論であつたと思う。

そして説得力を欠いて益々表性的＝軍事的手段に依存しながらのそれは農村に恐怖と肅清を広げただけでなく、党の中に官僚主義と行政的軍事的指揮系統を肥大させ、スターリン体制を準備するものとなつた。〔註〕

〔註〕この戦時共産主義における農民政策の問題性は、プレストリトウスク講和をめぐる、SR左派の祖国愛国主義からするレーニン狙撃によるSR左派の非合法化＝ボルシャビキとSR左派の統一戦線の解消という事態によって相乗されていた。10月革命において農民を代表していたのはSR左派であつたから。ここは今日的には内ゲバ問題への対処とつながってくる。

しかも当時のロシアは圧倒的に農業国であり、レーニンが5つのウクライドで分析している通り、広大な小商品生産に取り巻かれている状態であつた。このような中でNEPへの転換は唯一の革命ロシアの延命方策となつた。

(2) 〈21年転換〉の歴史的意義について

レーニンは当初NEPを一時的退却・やむを得ない妥協と強調している。トロツキー・

ジビエフ・スターリン等の大半のボルシャビキにとってもそうであり、それは早急に脱却していくべきものであった。(それは後に左翼反対派の綱領～スターリンの工業化路線へと引き継がれていく。)

レーニンは当初、ロシアの主要な問題は広大な小商品生産、それがもたらす自然発生的無政府性非組織性に対して、Prは社会主義国有産業の管制高地を握りしめ国家資本主義と同盟して記帳と統制を強化し、管理を実施していくべき強調したが、労働者と農民の関係が安定していくにつれ、そして NEP 下でテクノクラートや商人の台頭を見ながら考えを変えていく。

NEP は長期的で持続的なものであり、その中で協同組合等を通じて全人民を記帳と統制、管理と運営に参加させ、学んでいく、そのための文化を成長させていくという道筋として積極的に活用すべきとして、より前進的積極的に位置づけようとした。

全人民が記帳と統制の習慣を身に付け、全人民が社会全体の中での結びつきを自覚しながら管理と運営に参画していくことが可能となる<文化>が行き渡ること、それが社会主義の前提と考えたのではないか

そしてPrはこういうことの組織者教育者たるべきであり、そのことにおいて指導権を国家資本主義と争い、農民を率いていくべきであると。これは従来の社会主義革命論からすれば画期的なことではないだろうか。

{註}そしてスターリン体制がこれと真逆の道を進んだのも明白である。ただレーニンは戦時共産主義の総括を残さなかった。だからともすれば戦時共産主義を理想化し、その当時のレーニンの言説を教条的に振り回す誤りも多く経験している。(ex 文革期の「4人組」)我々は労働組合論争から多くのものを学ぼうとしたように、このNEPからも多くのものを学び、その総合化の中から新たな道を見出していくべきではないだろうか。

{註}第2インター系からは「ロシアには社会主義のための前提条件が存在しない、そういう中で社会主義革命に進みだすことは本来無理なことであり、失敗せざるを得ない、ボルシェビキは権力に着くべきではない、それは必然的に変質する」といった批判が投げかけられていた。

レーニンもロシアが社会主義のための前提を欠いているということを認めている。帝国主義＝資本主義の最高の発展段階＝社会主義革命の前夜であり、「さしせまる破局」でのべているように「社会主義に向かって進む以外にない」という認識にたちつつも、戦時共産主義の無残な結果をもってこのように言わざるを得なかった。

別の道・別の方法でのこの前提の確保という課題こそネップであった。で、社会主義のための前提条件とは結局なんであったのだろうか。あるいはソビエト+電化といい、あるいはドイツの郵便組織のようなものをいい。あるいは労働がシステム化される大工業の発展を言ったりしているが、つまるところは、<文化>の

問題に行き着いたのではないか。全人民が記帳と統制の習慣を身に付け、全人民が社会全体の中での結びつきを自覚しながら管理と運営に参画していくことが可能となる<文化>が行き渡ること、それが社会主義の前提と考えたのではないか。

(3) ロシア革命と<21年転換>の歴史的意義について—その2—

<21年転換>は共産主義運動の歴史的画期をなすことになった。永続革命の戦術と革命的強襲による移行期の一挙的推進として考えられてきた革命論の超克であった。

ロシア革命は直面する Br 民主主義革命で Pr が指導権を勝ち取り農民と同盟して推進し(労農民主独裁)、その徹底によって社会主義革命を準備し、貧農と同盟して社会主義革命へと押し広げる(その間を区別するのは Pr の意識と組織の度合いだけ)という「二つの戦術」以来の追求を、帝国主義戦争、ソビエトと二重権力状態という特異な経験の中で実現し、「さし迫る破局」での「下からの民主主義的統制」という革命的民主主義、そしてコルニーロフ反乱の粉碎を通じて 10 月蜂起へと上り詰めた。

権力獲得後に「ソビエト権力の当面の任務」として着実にスタートする予定のものが、反革命干渉戦争の内戦下という現実において「戦時共産主義」という革命的強襲でもって共産主義への移行の一挙的推進へと推転した。

21 年の転換はその破綻の克服として社会主義への持久戦的な新たな出立であった。

欧州でも革命的強襲に時期は終わり、革命の持久的準備(権力獲得のための、権力獲得後の社会主義建設のための訓練)=多数者の獲得、統一戦線戦術、陣地戦、ヘゲモニー等々が問題となっていたが、これには別の論考が必要とされる。それに対抗して Br の側ではフォーディズム・ケインズ主義がファシズと並んで台頭してくることになるが、ここではそこまで論及はしない。